

底が突き抜けた」時代の歩き方 520

なぜ、女は、ときどき男もこんなに「生きづらい」のだろう

作家の栗田有起と精神科医の香山リカが、「選べる時代の生きづらさ」のタイトルで対談（『すばる』05・12）を行っている。もう少し厳密に言えば、「選べる時代の選べないことの生きづらさ」ということになるだろう。大学のゼミで催眠療法の専門家を招くと、「大学生だから、催眠療法といったら、彼女の心が知りたいとか、親を眠らせて好きに操りたいとか、そういうのが出るのかと思っていたのに、他人を知りたいというのはほとんどなくて、催眠を使ってでも自分の気持ちを知りたいというのばかり」で、「自分がわからないというのにも驚いたし、就職するのに自分がわからないと就職活動ができないというのにもまた驚いた。催眠療法を受けてまで自分のやりたいことを知って、就職はしなきゃいけないものなのか」と香山リカが冒頭から切り出すかたちで対談は始まる。

この疑問に民間への就職経験のある33歳の栗田は、「就職する前というのは、わからないことが嫌というか、恐怖というか。情報をいろいろ得て、自分はある程度わかっていると安心したかったのかもしれませんが。実際にはそんなことできるはずがないんだけど、社会はこんなものという感じをつかんでおきたかった」と答える。学生生活の延長では捉えられない、大きく隔絶した社会に一歩足を踏みだすことの不安が就職というかたちで押し迫っており、その不安ないし恐怖が「自分にはやっていけるか」という自信のなさとして自分に押し寄せ、自分がやっていける会社を探すために、自分というものを知らなければならなくなっているのだ。会社の中でうまくやっていくためには、自分を会社に合わせていくのではなく、自分に合う会社を見つけるという思考方法を取っているために、「就職するのに自分がわからないと就職活動ができないということになってしまうのだ。

自分に合った会社など永遠に見つかりっこないから、「そうやって自分を探してみたら、それが自分の思い描いていたものと違ったら、どうするんでしょうね」と香山は疑問を発し、「問題は、もしそうなったときに、ああ、そうなんだと素直になれるかどうかということなんです。多分、彼らは、これは違っていると主張すると思うんです。だから、自分を見つめたいと言っても、実は小説家に向いているとか、広告代理店のコピーライターに向いているとか、ある種のファンタジーを持っていて、それを誰かに言ってもらいたいみたいで。自分からやりたいと言うのが嫌だから、わざわざ回り道をしている気がする」と分析してみせる。その証拠に、「何をやっていいかわからないと相談してきた学生に、小さいけどこの会社よさそうだよ、なんてアドバイスをすると、怒っ

て、俺にこんなところに行けっていうんですかとか、どうせ私はケータイの営業しかできませんよ、なんて逆ギレしたりするんですよ。」

そこで、「ああ、そうか、この子たちは何でもいいのか、どうせ何もできないとか言いながら、実はものすごくプライドが高くて、自己愛も強い上で言っているんだな、と。(中略)自己啓発セミナーなんかで、あなたはダイヤモンドの原石ですと言われたいのに通じるものがある」ことに、香山は気づく。「自分を探したらきっと、自分の知らない、すばらしい自分がいるはずだと信じている」(栗田)点で、若者たちは、「自分という病」に陥っているといわねばならない。「自分について知りたい」という欲求は、自分が望む「自分について知りたい」のであって、他人はそんな自分の欲求を満たすために存在しているだけだから、当然、他人の気持など考えないし、「自分を客観的に見たり、他人の立場に立って考えてみようという発想がない」ので、「小説を読むことで他人の気持を考えるというよりも、別の世界に、何も考えないまま行けるという一つの手段なのかもしれない。」(栗田)

他人の気持など一向に考えない癖に、他人は自分の気持を考えるべきだし、一向に考えてくれないという不満はもちろん、自分が自立できていないところからやってくる。自立とは他人に依存しないだけでなく、自分にも依存しないことである。「自分という病」はしたがって、「自立できない病」にはかならない。「自立できない病」のごく一般的な事例として、2、3年前に大阪で起きた、カップルで一緒に住みたかったから親を殺したという「ゴスロリ殺人事件」があり、「駆け落ちすれば済むのに。親を殺してまでそこに住み続けたいというのが、ショックだった。ちょうどインターネット心中もその頃出始めて。行き場がないから自分を消してしまう。」(香山)まず、「家を出る」ことから自立に踏み出すのではなく、「家にいても大変、自立して一人になっても大変。結局大変なら、より楽な方でいいやって」ことになり、「自分にとって居心地の良い場所はどこか探さない。探す手間さえ大変なことになっている。」(栗田)

幸せになりたいと思っているのに、不幸な方向へとどんどん向かっているようにみえることについて、「恋愛ひとつとっても、わざわざうまくいかない相手とつき合ってしまう人っていますよね。何でだろうって見てみると、何も無いよりはましだと思っているんじゃないか」、「恋愛って大変だわっていうのが口癖で、そうか、この人は人を愛するよりも、大変なことをしたいんだなって思いますよね」と言う栗田は、「幸せがいいんだ、というのも強迫だと私は思うんですけど、そういう思い込みや盲信に脅かされていれば、生きるのがつらくなるのは当然ですよ。生きづらい世の中と言われますけど、生きづらくしているのは他にもない自分自身」であり、「幸せって何か考えはじめると、自分ひとり幸せであるのが、真の幸せといえるのか、いつも思うんです。自分の内側ばかり見つめていても幸せには辿りつけませんよね。幻想の幸せをやみくもに追い求めるより大事なことがある、それは自分に与えられた役割のなかにあるのではないかと思うんです。それを自覚するところから、本当の人生は始まるような気がします」と嘯みし

めるように言葉を発して、対談を締め括る。

自分の追い求めている幸せが幻想であることに気づくことから始まって、自分に一体なにができるのか、という自分の身の丈に合った役割を掴み取ってくるところに「本当の人生は始まる」ということだが、この二人の女性の対談で最も考えさせられるのは、男であるが故に見えない、「女性であること自体の申しわけなさ」(香山)について話し合われている個所である。女性がたくましくなって男性が女性化しているという話題について、「けど、男性がいくら女性化しているといっても、最終的には『俺は俺』みたいな、男であるだけで安心というところがまだあるような気がするんです。反対に、女性は、女であるそれだけだと何だか申しわけないというか、さらに何かでありたいと望みますよね。その違いが生物学的なものに由来するのか、あるいは社会的なことなのか、よくわからないんですけど」と、香山が問題の口火を切る。

栗田が、「背景に家がなきゃだめとか、子供がいなきゃだめだというように人の目を気にしてしまう。何かやっていますと肩書きをつけていないと、周りが納得しないし、自分そのものも落ち着けないような」と同調すると、香山は友人の優秀な女性編集者には、「兄がいて、二人とも実家を離れて暮らしている。実家に帰るとき、友人は、まず帰る日付を知らせて親の都合を聞いて、そしてお土産を考えて、やっと帰るのに、兄は手ぶらでふらりと帰るというんです。それが彼女には信じられない」という話を持ちだす。そののになにが問題なのかというと、「兄は、俺が帰ってきてやったら喜ぶだろうと無邪気に、裸で帰れる。でも妹は根回しをして、物を持って、初めて帰ることができる。それが性格というより女性であることの本質に、何か関係しているんじゃないか」ということらしい。そう思うなら、妹も兄と同じようにすればよいではないかということだが、どうも問題はそういうことにはならない。

栗田 求められているわけではないけれど、無意識のうちに先回りして考えて、相手がどう思うか、気持ちを察しようとする。

香山 そのままの自分だと受け入れられないんじゃないかと不安だから、お土産をつけてしまうように。

栗田 それは、女性に社会的な自信がないからなんでしょうか？

香山 もしかしたら、そこにこそ精神分析でいう、男と女の問題が関係しているんじゃないかとも思うんです。単純に、社会的に自信がないというだけではなく、彼女は編集者としてもものすごく活躍しているんだから、土産なんて考えず、こんな本作ったと持っていけば済むはずなのに、できない。選べないわけですよ。

栗田 生物学的な違いとおっしゃられましたが、女性であることで、あらかじめ何か体に備わった機能で読み取るとか、感じる場所があるようにも思います。女は周りの空気だとかを察知しないではいられない。

香山 でもそれが、女性であること自体の申しわけなさなのかもしれないとも思うんです。

私よりも上の世代では、男の子の誕生を喜んで、女の子が生まれるとちょっとがっか

りすることがあからさまにあった。勉強ができたりすると、あなたが男だったら……なんて言われて、具体的に、女で申しわけないと感じることもあった。

ただ、今は女の子を望む親も多くて、男の子が生まれると、ああ、男かと言う親もいますから、別に女であることの産まれながらの申しわけなさは、ほんとうはないはずだと思うんです。

以上のやりとりに続いて、「男の申しわけなさも出てきてい」と香山が言えば、栗田は「女だったらたとえ仕事もせず、家にいても家事手伝いということにしておけばいいのになんて。でもそうじゃないんですよ、現実。ノやはり女性が妊娠・出産をする、産む性であることが関係しているのかもしれませんが。私も今33歳で、どこかで体が問いかけてくるような感じがありますから」と答え、「何となしに、産むべきなんだろうかと考えさせられるときがあるんです。自分のことなだけけれど、よくわからない」と産む性としての女の問題に触れる。すると香山は、「子宮の声とかいうやつですか。ほんとうにあるの？ そんなもの」と訊く。栗田が「でも、こんなふうに、自分で自分を縛っているというか、自家中毒のようになっている女性が多い気がするんです。なんで女性だけが、悩まなきゃいけないんだろうかと思ったりもしますが」と打ち明ける。

「以前、学生に、自分が24時間で死ぬとしたら何をするかを尋ねたら、ある男子学生が、子種をたくさん残すと言ったんです。そのとき、女子学生は、そうか、男は24時間あればそうやって子孫を残して死ぬことができるんだ、としみじみ言って」と香山が大学での話をして、「男性なら、実際にそういう行為ができるかどうかは別にして、凍結精子での人工授精なんかを含めれば基本的には何歳までも子孫を残すことが可能だったりする。女性には限りがある。その制約というのは、決定的なものとしてありますよね」と、女性としての悩みが女性としての制約でもあることを裏付けてみせる。子供を産むことについて栗田は、「自分一人ですることではないですけど、周囲の若い女性たちの中には、産んだほうがいいんじゃないかと思いつめる人もいて。何でそんなふうに考えるのか聞くと、子供を産めば幸せだからと言うんです。でも、産んだことがないのに何で幸せだからなんてわかるのと。むしろ大変だという情報のほうが多いのに。ノ産んでもいない状態で、産んだらきっと良いはずと思い込んでしまうのも、一種の呪縛なのかもしれません」と踏み込む。

どうして「子供を産めば幸せ」になると思うのか。「子供は子供で別の人格だから、それは幸せの一部かもしれないけれど、産んでも自己そのものは変わらな」(香山)いのに、「子供イコール幸せだと思いたいものだから、その幸せを具現化するために信じてしまう」(栗田)ようにみえるが、「小動物を見るような感じでかわいいとは思う」(栗田)以外に、「女性が子供に悩むのは、さっき話に出た親との関係に起因するところもきっとある。親が孫の誕生を喜んだりすれば、自分が褒められたみたいで満足という気持ちにもなる」ことを、香山は指摘する。「やはり仕事を持つ女性で、子供を産んで、親に捧げ物をしたような気がする」と言う人がいました。そして、彼女は褒めてもらいた

いんだと。こんなにかわいい孫を産んでくれたあなたは偉いと。だから孫ばかり褒められるとしゃくにさわる。あくまでお母さんである彼女が偉い、あなたが産んでくれてありがとうと言ってもらいたい。」

女性が子供を産むのは、自分が子供を産むことであると同時に、自分が帰属する家(親)の子供を産むことであるのがわかる。だから、「よくやった」と子供を産んだ自分が親(家)から褒められることを望むのだ。親(家)のために子供を産んだという気持ちがあるから、「親に捧げ物をしたような気がする」のである。「そして母親が褒められるために、言葉は悪いけれど『使われた』子供というのは、いつか絶対に、自分は何のために生まれたんだろうと思うと思う」と香山が言うと、「でも、それも連鎖でしょうか。その母親もまた同じようなことを母親にされてきたのかもしれない」し、子供を産むことに「単純な喜びじゃなくて、そこまでやらなきゃ、持参金の一部じゃないけど、自分の存在意義を見出せないというところが、今も強くあるような感じですね。そういう付加価値がなきゃいけないという。別に子供を産まなくてもいいじゃないというふうにはならないものなんですかね」と、栗田は応答する。

「女性であること自体の申しわけなさ」が子供を産む女性にこれだけの負荷をもたらすなら、子供を産んで当たり前の女性が子供を産めないことで申し掛かってくる負荷というものはどれほど想像を絶するものだろうと思う。子供を産む、産まない以前の非婚女性にとっては、結婚した女性が悩む子供を産むことにまつわる問題ですら、自分たちの手の届かない贅沢ということになるのだろうか。こういうことを考えると、結婚しておらず、子供いずの「負け犬」女性とか「勝ち犬」女性という、世間が面白がって^{はや}囃し立てた流行語は、なんと「女性であること自体の申しわけなさ」の傷口に塩を無神経に擦り込む残酷な仕打ちであることかと思わずにはいられない。

孫ばかり褒めるのではなく、「こんなにかわいい孫を産んでくれたあなたは偉い」と褒められたいという、「ご褒美感」を求める人々」が多くなったことの裏返しとして、「やっと仕事についても、自分が職場で正当に評価されていないと不満をすぐにもつ人」も増え、喜びの得られなさを訴える患者が特に多くなったことに香山は注目する。「仕事以外でも資格を取るとか、とにかく頑張るんだけど、完遂した、資格が得られた瞬間に、それがむなしく見えてしまう。やった、合格したというときは一瞬。あまりにも喜びの賞味期限が短い」から喜びを持続させるための工夫についても必死で考え、喜びは自然には訪れないことをつくづく痛感させられることになる。「ご褒美感」には「ご褒美」が得られないことのつらさがこびりついていることを、香山は「資格マニア」の生きづらさについて語る。

「資格マニアみたいな人は、資格を取ること自体が目的だと信じているんだけど、心のどこかにその資格を取ったら、世界の景色ががらりと変わるんじゃないかみたいな期待があるわけですよ。でも、別に、たとえば英検の準一級を取ったからといって、すぐ明日からバラ色の未来が待っているわけでもない。

こんな話じゃなかった、と落ち込む。そこで気づいて、資格の紙切れで私の人生が変わるわけじゃないんだから、もっと違うことを考えようと切り替えられるんならいいんだけど、その人たちは、必ず、そうか、準一級だからだめなんだ、一級ならいいに違いないって、また走り出す。

その不満感って何からきているのか、疑問ですね。だったら、人に評価されればうれしいのかというと、そういうわけでもない。相談してくる人の中には、客観的にみて、明らかに成功している若者もいるんです。何の不自由もなかろうみたいな。それでも、また何か違うと言う。」

なにもできないが故の「不満感」ではなく、なんでもできて成功しており、「何の不自由もなかろう」ようにみえるのに募ってくる「不満感」の正体について、「こんなものないのか、お金はあるにこしたことはないけど、あったってしょうがないとか、人気があったって、しょせんそれは不特定多数だとか言い出して。もちろん、これぞ幸せなんて形があるわけじゃないけど、どうなれば、まあまあ満足できるのかわからない」が、「きっと、母親が子供を、ご飯を食べただけでよく食べたわね、おりこうねと褒めるような、あれを求めているんだと思うんです」と香山は分析する。もしそうだとすると、「不満感」というものは、「ご褒美感」を「いちいちそういうふうに与えてもらわないと、満足しない体になってしまった」(栗田)ところから、たえず突き上がってくるのだろう。

「だから、子育て中のお母さんなんかは、誰にも褒められないというのがしんどい。自分は子供を褒めなきゃいけない、それこそ、よく歩いたわねと言わなきゃいけない、褒める一方なのがほんとうにしゃくでしょうがないとか言って。子供ばかり私に甘えて、甘えたいのはこっちのほうだとか、わけのわからない怒りを持ったりする」(香山)ことになる。「褒められるだけでは満足できないことに、どうして気づけないのか考えると、やはり自立できていないからなのかなと思います。自立していれば、他人に褒めてもらえなくても自分ひとりで満たされることができ」(栗田)ということだが、心理学者の小倉千加子と作家の中村うさぎも『世界』(05・12)の対談で、「生きづらさ」の「“ヒリヒリ”した感覚!」について語り合っている。

98年以降の日本では、自殺者が3万人の壁を突破しつづけ、50代以上の男性が一番多く、経済的な理由が突出しているが、「日本において、18～24歳の女性の死因の第一位はずっと自殺です。いまや中年男性の自殺のほうが顕著なので女性の自殺願望はそのかげに隠れてしまっています。しかし、若い女性の場合、死なない程度の自傷行為という形で、より蔓延している」と小倉が報告すると、買い物依存、ホスト熱、美容整形、風俗嬢の体験というかたちで、いろいろな嗜癖を繰り返してきた中村は女の「生きづらさ」についてこう語る。

「自分も含めた女の人たちが生きづらい、生きてて苦しい、薄皮をはいでいるような生傷っぽいヒリヒリしたものは常にある、と言っています。致命傷では全くないし、たと

えば重病で常に痛く苦しい人から見れば、『ただのささくれじゃん』と言われるようなもの。でも、些細だけれど常にささくれている。些細だから、堂々と『痛い』『苦しい』と言いにくいことも含めての感覚です。」

買い物依存症に陥った中村が「存在の底に欠落感がある」(小倉)ことに自覚的になったのは、「一段落して『私は何を買いたかったのか』と考えて書くようになってから」で、「当時は、生きづらいから買い物をするという気持ちは全くなかった。」買い物依存症の恐怖は、「経済的な破滅などよりも、自分で自分のコントロールができなかったこと。それまで自分は自分で手綱を取って生きているつもりでした。」その原因は、「自分に何が欠落しているのかがわかっていないから」で、「私は、結局は『自分』が欲しかったんだと思います。金を払って自分を買う行為。本当はこうなりたいという自分を、金を払って買おうとした。しかも『人からみた評価を上げたい』ために。／たぶん私は、それまでの人生が順位至上主義者だったんだと思います。勉強でも何でも、一番になりたがりなのに、なったことがない。そのコンプレックスと自分の手柄が認知されない鬱屈、その二つが原動力になっていたと思います。／私は買い物依存のピーク時はジュニア小説家でした。ジュニア小説は、売り上げ至上主義の世界。売れた人が一番偉い。そういう、数値だけの世界だったのに、一番が取れない」と述懐する。

先の対談で栗田有起が、「自分の評価を他人にゆだねると、必ず不全になりますよね。だって、他人が自分を正当に評価できるはずがない」のに「“ご褒美感”、というか、いちいちそういうふうに与えてもらわないと、満足しない体になってしまったんですかね」と言っていたことが想起される。中村うさぎもまさしく「“ご褒美感”を求める人々」の一人であり、その渦中でのたうち、苦しみ、もがいていたのだ。誰でも初めから自分で「自分を正当に評価できる」わけではない。他人から褒められて育ち、やがて自分で自分を褒めながら育っていけばいいのだが、他人から褒められるうちに“ご褒美感”を求める体質になってしまうことが当然起こりうる。他人の評価に拘束されて、もたえ苦しむ渦中から自分はどのように抜けだそうとしてきたのかを、中村うさぎは語っていたのだ。

順位至上主義の受験競争にも似た世界のなかで、「そういう競争に巻き込まれていく怒り」(小倉)は「私の上にいる人たち」に向かったと中村は言う。「下の人には視界に入らない。下の人がいることは知っています。私は調子がいいときには4位か5位くらいでしたけど、そのときは6位以下が誰かなんて知らない。新人が出てきたらひやひやして、でもその新人が自分の順位を追い抜かさなかったら、もうその新人のことは忘れます(笑)」小倉が「階層社会では、下の階層は見えないんです。存在しているのに、透明人間のように見えない。外の社会の縮図ですね。そして常にワンランク上を目指すようになるんでしょ？」と訊くと、中村はこう答える。

「そうしないといけない、というだけじゃないんですよ。そこに快感もある。のし上がっていけるという快感。売り上げ至上主義ですから、デビュー作でいきなり先輩を追い抜くこともあるわけです。そのときの陶醉感は本当に気持ちがいい。年功序列じゃな

いからね。そういう自分の、わかりやすく成り上がっていく傾向は、正直、恥ずかしいという気持ちもあるけど、成り上がり者の気持ちよさもある。

上をめざすだけだから、成り上がり陶醉感は最初だけで、あとはずっと、転落不安だね。転落不安と、自分の上にいる人に対する怒り。その二つで生きている。」

その「転落不安」は「経済不安というより、地位を失う不安。あと、下の者に追い抜かれる不安」であり、「努力すれば何とかなるという努力万能信仰の狂信者だと自分で思います」という中村に、小倉が「あるがままの自分を受け入れるより、どれだけの男に美人と言われるかの方が重要だ、と思う女の子の気持ち」について尋ねると、「賞賛を得なければ、自分で自分の顔を好きになれないと思う」のはよくわかると、次のやりとりに入っていく。

小倉 そういう傾向は、世界で日本人女性が一番強いんです。自分が美しいと思えない人の割合が、先進国の中で日本が一番高い。どれだけ自分で自分を美しいと思っているかではなくて、基準がモテてるか否か、なんですよ。日本では女性誌がモテ髪とかモテ服といった情報を流すでしょう。

中村 あれは驚きましたね。私は順位至上主義のくせに、その順位で偉そうにするのは表層的なことだ、という意識もあるんです。だから、『モテてなんぼ』と思っている一方で、『モテるための服やメイクはいかん』とも思う。だから美容院で女性誌のモテ服特集を見たとき、本当にびっくりした。『モテ服』という言葉がある。堂々と謳うテーマなのか。『それ、男に迎合することだよ?』って。

小倉 モテるだけでなく、広い意味での幸せを求めて、いろいろな生きるための工夫が雑誌などに出ていますね。その裏にある、人の生きづらさ、生き難さとして感じてきたことはどんなことですか。

中村 生き難さというのは、自分の期待に自分が応えられないことの裏返しだったんじゃないか。だからもしいろいろな嗜癖を持っている人が生き難いとしたら、私は自分の経験からして、たぶん自分の期待に自分が応えられない、私は私を好きになれない、ということなのだと思います。

つまり日本人では『私は美人だ』とっていない人が一番多いように、美醜の問題だけではなく、『私はこれでOK』と言えない。では、他人の視線に振り回されていて、他人がダメ出しをしたから自分のことに自信が持てないのかということ、それも本当は客観的な評価ではないんです。ダメ出しする他人もいれば、OKと言ってくれる他人もいるはず。なのに、OKの評価よりもダメ出しの方が、自分の中で残っている。つまり、他人の評価だと思っているものが、実は本当にリアルな評価ではないということでしょう。つまり、全員にかわいいと言われたい、という欲深さが根底にある。でもそれは現実にはありえない。ありえない自分を求めていることが、女の人の生き難さの根底にあるのかなと思います。

栗田有起が言うように、「幸せにならなければならない」という呪縛は「結局自分で作りだす、一種の病気」だし、「生きづらい世の中と言われますけど、生きづらくしているのは他にもない自分自身」であることが、「全員にかわいいと言われたい、という欲深さ」に翻訳されて、中村うさぎによって語られているのだ。やはり、“自分という病”に囚われてしまうのである。「自分の期待に自分が応えられない、私は私を好きになれない」、そんな自分をどのように始末すればよいのか、という最大の問題から否応なしに歩き始めなくてはならない。好きになれる自分が自分の中に皆無であり、嫌な自分しか自分の中に詰まっていなくて、そんな自分から必死に逃げ出すことに全エネルギーを注ぎ込もうとするのだろう。しかし、嫌な自分であろうとなんでであろうと、自分から自分が逃げ出すことが永遠に不可能であるのは明白である。

では一体、どうすればいいのか。嫌な自分を少しでも好きな自分にしていくしか方途はない。少しはマシな自分に変えていく道程が人生なのであろう。人が歩いていく途は自分の外にあるだけでなく、自分の中にもあるのだ。中村うさぎが「ありえない自分を求め」つづけるのは、いまの自分が嫌で嫌でたまらないからであり、「努力万能信仰」によっていつかは「ありえない自分」に自分の手が届くことができると思い込んでいるのだ。いや、そう思い込まざるをえなくなってしまうのである。もちろん、「ありえない自分」はいつまでも「ありえない自分」でありつづけるから、そこに行こうとしてどうやっても行き着けない自分はずっと苦しみつづけてはならない。「私の中にもあれもこれも欲しいというのはある。そうでなければ、絶対に美容整形なんか行かない。だってそもそも私は物書きでタレントでもないし、美醜なんて関係ない。なのに、そこも点数が高くないと嫌だというのが私の中にはある。オール5を取りたい、みたいな」と中村うさぎが言うのは、「オール5を取」れるような、そんな「現実にありえない」自分でないと、好きになれないということなのだから、無間地獄だと形容する以外にない。

栗田有起が、“ご褒美感”を求めたがるのは自立できていないからで、「自立していれば、他人に褒めてもらえなくても自分ひとりで満たされることができ」るのに、「家にいても大変、自立して一人になっても大変。結局大変なら、より楽なほうでいいや」ということになってしまう。「自立できない病」について指摘していたが、小倉と中村の対談からは「自立できない病」というより、自立したくない傾向がくっきりと浮かび上がってくる。「モテなければ女ではない。結婚しなければ人間ではない。それを本気で信じて」おり、「大学生が、結婚できなければ、もう人間以下なんだという強迫観念を持って」いることを小倉が報告すれば、中村が「つまり、自立女性の価値が暴落しているということですね。それは私も感じます。私たちの世代では自立することが第一目標だった。自分で自分を支えていける女になりたかったし、それが格好いいと思ってました。それは一人で生きていける女だった。それが、いつか、一人で生きていけるというのはメリットではなく、一人で生きる女、イコール寂しい女ということになっていっ

た」と応じる。

なぜ、自立する女は「寂しい女」とみられるようになってしまったのか。経済力があっても「所属感を得られない」からだとか小倉が説明すると、中村はすかさず、「自立して経済力ももっている」のに、どうして「所属する必要があるのか」と反論する。すると小倉は、「でも、それだけじゃだめなの。彼が自分よりワンランク上であること、つまりワンランク上の人に選ばれた自分に意義があるんだから。どこに所属するか、が自分の価値。だからここでも数字至上主義です。若い女の子が自分の商品価値を、彼氏が支払う価格で証明するんだから。おごったり割り勘にしたりしたらだめなんです」と言う。「女は男にお金を払ってもらってなんぼという考え方は、私たちよりも二世くらい前」のもので、「一回私たちの世代のような自立至上主義になった。その女たちが挫折したから、いまの若い世代が先祖返りしているってこと？ いつからそうなっちゃったのかなあ。やっぱり私たちが悪いんじゃないですか？ 私たちが女性の自立のモデルケースになり得なかった、ということですよ」と、中村はショックを隠せない。

「自立とは一人で生きていけるということだから、孤独とワンセット」であり、「孤独を受け入れられるのは強さだと思う」が、結婚しても「孤独な女はいっぱいいる」と中村が言っても、「現実にはね。でも幸せそうに見えて実は私は孤独なの、とは、先行世代の既婚者は絶対に言いません」し、「今の若い人たちは、思春期のときからはっきりと『寂しい』と思っていますよ。生きづらいイコール寂しい。寂しさを癒したいから、いまの若い人が求めているのは恋愛ではなく、結婚であり家族です。一番肝心なときに一人っきりにならなくても済むように。だから別に恋人でなくてもいいんです。恋人というのは、理解ある家族のことですね」と小倉は説明する。

「本当に寂しいのはいやだ、と心の底から思った時期があっ」て、最終的には結婚した中村も、小倉のその説明には納得する。「家庭回帰の傾向」(小倉)の強まりの背景には、就職システムや家族基盤の崩壊によって、若者たちが「挫折する前から絶望させられている」(中村)社会的な現実の息苦しさが大きく横たわっていることも話し合われている。「みんながライバルという偏差値教育と、お前の将来のサイズはこの程度だよという経済的な不況。それが若い人たちを男女の区別なく生きづらくしている。その中でも女性は女性偏差値と、それでも働いて食っていく仕事のうえでの偏差値と、両方を磨こうとするから大変、ということ」(中村)だけでなく、男性にとっても「結婚や就職にあぶれてしまう状況で、みんなが就職や結婚で癒しや安定を求めらる中で、これから老いを迎えようとする自立世代の男女」(小倉)はどのようにみえるか。それほど幸せそうにみえないから、「若い世代から家庭回帰にな」(中村)っていく。

しかしながら、「家庭回帰の傾向」が強まるからといって、「家族として機能していない」(中村)従来の家族が求められているわけではない。

「従来の定義で言うと家族を持っている人も、60歳くらいになると家族を求めらる」ほど「既成の家族は当てになら」ず、「自分がギックリ腰になっても夫はゴルフに行くし、

娘は枕元にあんパン一個置いて会社に行く。誰も自分に関心がない」というような家族は多い、と小倉は言い、家族の機能として、「経済的・精神的相互扶助、つまり最少単位の社会福祉」を挙げる。

中村 うん。それこそ、気兼ねなく「助けて」と言える相手ですよ。そうか、現代に必要とされてる「家族」って、遭難しそうな自分を助けてくれる他者なんだ。私たちの「生き難さ」って、結局、「私は遭難しそう。助けて」って気持ちだもん。

小倉 究極的には「看取る人」が家族とも言えますね。

中村 うん。たとえば明日死ぬとなったときに誰と一緒に。私はやっぱり今の夫に枕元に来てもらって、「今までごめんね」とか「ありがとう」と言って死にたいなあ。

小倉 地球が明日消滅するという最後の一日を誰と過ごすか。それが家族。

「それが、愛だ」と言う中村は、「昔は恋を愛にうまく変容させていく技術があったと思います。よくも悪しくも『この人でいいや』と思って、穏やかに暮らしていきましょーうと、いろいろなものをあきらめていく。昔の人はそういううまくあきらめる能力、恋から愛に変容させる能力があったのかもしれない。でも、いま、男はバイアグラを使ったり、女も注射で10歳若返らせたり、あきらめなくなった。そのあきらめなさ、恋を愛に上手に落ち着かせていく能力を損なわせたのではないかと思う。いま『恋を愛に変えてあきらめよう』はコンセンサスが取れないですよ。『じゃあ、恋はどうなるのよ』と、「ある種の自己確認を恋愛に求め」たくなる衝動をどうしても吹っ切れず、「現実にはできない」ことがわかればわかるほど、冬ソナなどにも煽られて「現実には恋をしたいなんて思い始めちゃう」苦しさに見舞われてしまう、とくに中高年女性における「恋愛飢餓感」(小倉)の切実さに目を向ける。

結局のところ、「この“ヒリヒリ”した」生きづらさの感覚は、人が生きている限り、一生つきまとっているということだ。対談で、「現代に必要とされてる『家族』って、遭難しそうな自分を助けてくれる他者」(中村)であって、自分が病気のときに看病もしてくれないような夫や娘ではないとすれば、「誰も自分に関心がない」ような家族関係しかつくりだしてこなかったことの沁み入るような内省抜きには、「遭難しそうな自分を助けてくれる他者」を求めること自体が“ご褒美感”を求めるのと同様、無い物ねだりにほかならない。要するに、「自分を助けてくれる他者」を求めるには、自分もまた相手を助ける他者にならなくてはならない。こちらが差し出す手と相手が差し出す手とが重なり合わなくてはならないのだ。自分の手に余るときに相手の助力を仰ぐためには、なによりも自分も相手も自立していなくてはならない。自立した者同士による関係性の確立が図られる必要があるだろう。「自立が孤独で、孤独が厳しいのは確か」(中村)だが、だからこそ、自立は相手との関係を求めて止まないのであり、孤独は他の孤独との関係に開放的であって、けっして他の孤独を閉め出すことはない。孤独の深さに耐えることのできる自立は生きることの強さを絶えず先鋭化させていくにちがいない。

2005年12月31日記

